やわた御戸開き神楽解説

やわた大神楽実行委員会

やわた御戸開き神楽について

やわた大神楽は，平成７年11月25日から26日の早朝にかけて，八幡多目的研修集会所を会場に，殿迫名本山三宝荒神に奉納するため，盛大に行われました。この御戸開き神楽は，この大神楽から足掛け３年目に行われる神楽で，この御戸開き神楽が終わるまでは恒例の荒神祭りは催されないが，この御戸開き神楽以降は，翌年から秋の取り入れが終わると五穀豊穣と名内安全を祈願し，荒神祭りが開催されることとなります。

期　　日　平成９年11月30日から12月１日
場　　所　八幡多目的研修集会所
主　　催　やわた大神楽実行委員会
日　　程

11月30日
午後４時　湯立神事
５時　荒神迎え　諸神勧請
７時　七座神事
祝詞行事
神能「岩戸開きの能」
「国譲りの能」

12月１日
午前０時　夜　　食
１時　神能「八重垣の能」
３時　荒神送り
直　　会

榊　舞

神事の解説

湯立神事

清めの神事で，四隅に青笹竹をたて注連縄をめぐらし，中央に竈（かまど）を築き大釜で湯を沸かし，神楽の斎場や神殿を湯笹で清める神事。

荒神迎え

神職及び氏子が本山三宝荒神社に出向き，ご神体を白木綿で包み神殿にお迎えする行事。簡略化する場合は，神殿にしつらえたご幣にご神霊をお迎えする幣勧請（べかんじょう）を行う場合もある。諸神勧請はこの幣勧請により行われる。

七座神事

打立（うったて）・曲舞（きょくまい）・指紙（さすかみ）・榊舞・奠座（ござ）舞・猿田彦の舞・神迎えの舞を総称して七座の神事という。

打　　立

「座清め」とも言う。神楽を行うにあたっての試楽で，太鼓・笛・手打鉦を用い奏楽する。奏楽は「長唄拍子」「サンヤ拍子」「曲舞拍子」「千早拍子」「仕合拍子」の順で行われる。

曲　舞

「顔見せ舞」とも言う。神楽の基本舞である「初めの舞」「三膝（みつひざ）舞」「八膝（やつひざ）舞」「半帖（はんじょう）の舞」

を数人が舞う。

指　紙

「役指し」とも言う。神楽の舞人ひとり一人の役割を書いた紙束を竹串に挟んで舞い，神に奉告する意味がある。

榊　舞

ご座を清めるとともに，神職や舞人，氏子一同の身体や心を祓い清める舞である。榊葉を持って舞う２人舞。

莫蓙舞

神前に莫蓙を敷く，座清めの舞である。

猿田彦の舞

案人の舞と猿田彦の舞に分かれる。

案人の舞は，猿田彦神の由来を述べ，その神徳を称える舞である。

猿田彦の舞は，榊葉と太刀で舞う「榊猿田」と，太刀と長刀で舞う曲芸的要素の強い「長刀猿田」とがあるが，いずれも猿田彦神のご神徳により悪魔払いを行う舞である。

神迎えの舞

「神務」とも言う。幣使１人と舞人４人（神職）が努める。

東西南北，中央，黄竜それぞれの方角へ向かい，諸神勧請のお神楽をあげる。

祝詞行事

神前に神楽の趣旨と祈願の詞をのべ「み久米とり」等の方法により神籤をうかがう行事。

荒神送り

神楽を奉納したのちご神体を本山三宝荒神社にお送りする行事。

能舞の解説

岩戸開きの能

登場人物

天児屋根命　天布刀玉命
天思金命
天宇受売命
天手力男命
天照大御神

物　語

須佐之男命のかずかずの悪業にお怒りになられた天照大御神が天の岩戸にお隠れになり，世はとこ闇となった。このため天の安の河原に神々が集い岩戸開きの評定がなされた。

神迎えの舞

天思金命の思慮により，天の岩戸前において諸楽を奏し，天宇受売命がみ神楽を舞うことにより，何事かと天照大御神が岩戸をわずかにお開きになったとき，天手力男命が強力にまかせて岩戸を開くことが企てられた。

これが見事功を奏し，世の中はもとの明るさを取り戻すこととなった。

国譲りの能

鬼の姿の建御名方命と両神との合戦

登場人物

経津主命（ふつぬしのみこと）　建御雷命（たけみかづちのみこと）
大国主命（おおくにぬしのみこと）
稲背脛命（いなせはぎのみこと）
事代主命（ことしろぬしのみこと）
建御名方命（たけみなかたのみこと）

物　語

高天原に皇孫「瓊瓊杵尊（にぎにぎのみこと）」が誕生されたことにより，経津主命・建御雷命の両神が勅命を受けて，葦原中津国の主大国主命に国譲りをするよう説得するが，大国主命はこれに応ぜず合戦となる。

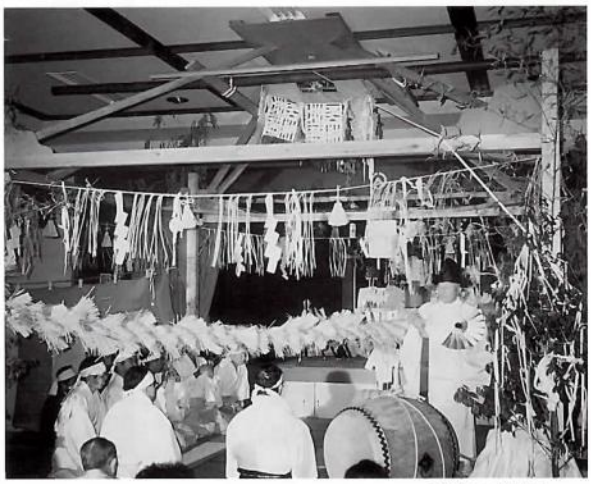
そこへ稲背脛命があらわれ仲裁を行う。その結果，大国主命の子どもである事代主命に相談を行い国譲りを行うこととなる。

しかし，二男の建御名方王子は国譲りに反対をし両神と合戦となるが，結局降伏をし国譲りが実現をする。

八重垣の能

登場人物

須佐之男命（すさのおのみこと）
足名椎命（あしなづちのみこと）　手名椎命（てなづちのみこと）
櫛名田比売命（くしなだひめのみこと）
松尾明神（まつのおみょうじん）　室明神（むろみょうじん）
杵名玉明神（きなだまみょうじん）
八岐の大蛇（やまたおろち）　蛇の霊魂（へびれいこん）



託宣の神事

物　語

七人の姫を八岐の大蛇にさらわれた両爺婆が，最後の櫛名田比売命もさらわれる運命に嘆き悲しんでいるところ，須佐之男命がこれを知り，姫を娶り大蛇を退治することとなる。

須佐之男命の依頼を受けた，酒造りの守護神松尾明神が，室明神・杵名玉明神の助けをかり八千石の毒酒をつくり，この毒酒を八岐の大蛇に飲ませる。

大蛇が酔ったところを須佐之男命が見事退治し，蛇の尻尾から霊剣をとりだす。この霊剣を取り返すため蛇の霊魂が現れ須佐之男命と戦闘となるが降参する。